

右之通市在不洩様可觸知もの也

〔太政官〕御布告 十一月十三日

脱籍無産の輩先般復籍方被仰出候處就中東京ハ從來人民幅濶
 の地にして籍外の者來往無産遊惰の徒不少候間別して復籍方
 可取計の處其時々遠國より受取人差出候儀不都合の情實も有
 之趣より自然御旨趣難被行候てハ不相濟候條以來復籍人引渡
 候節は其物脱籍の始末並生國親族等分明取調の上書取相添當
 人並家族共府藩縣送を以て引渡候間旅中入費の儀ハ其道筋府
 藩縣よて相賄可申尤藩の儀ハ東京藩邸へ可引渡候事
 但當人申立の件々一々本國へ掛合候てハ時日遷延致す耳な
 らず其他不都合の廉も有之に付當人申立の趣ハ基き家族相

添東京府より引渡候よ付府藩縣よ於て深く御旨意を奉じ引
 取の上夫々永久の生産を授け候様可致萬一當人僞言の次第
 も有之候ハ伺の上至當の處置可致事

〔太政官〕御沙汰 十一月十四日

仙臺藩

亘

理

元太郎

石狩國の内

札幌郡

空知郡

右兩郡の内其方支配被仰付候間地所の儀ハ石狩府より受取可
 申事

〔太政官〕御布告 十一月十五日

諸獻上の儀是迄の通り辨官へ相伺其獻物ハ直ニ宮内省へ可相
 納候事

〔太政官〕御布告 十一月十五日

今般東京府よ於て府治體裁夫々規則可相立旨被仰出候よ付て
ハ戸籍取調且又地方よ致關係候儀ハ東京府より直よ處置可致
候條其旨相心得右等の儀ハ東京府よりの指圖可受事

〔太政官〕御沙汰 十一月十五日

兵 部 省

東京府下取締筋よ付兵備無之てハ不相濟儀候得共府兵取立不
容易儀よ付當分の處東京府より兵士入用の見込其省へ申達次
第諸藩兵士人撰致シ同府へ可差送其上にてハ約束號令賞罰
陞よ至る迄都て同府へ御委任被仰付候得共兼て其省に於ても
可相心得置候事

但重大の儀處置致シ候節は東京府よりも其省へも可申達候
事

東 京 府

其府取締筋よ付兵備無之てハ不相濟儀候得共府兵取立不
容易儀よ付當分の處兵部省より差送り相成候諸藩兵士を以府兵の
姿よ組立約束號令賞罰陞よ至る迄都て其府へ御委任被仰付
候事

但重大の事件可相伺且兵部省へも可申達事

〔太政官〕 十一月十七日

贈從一位太政大臣平信長へ健織田社の神号宣下有之

〔東京府〕御 觸 十一月十七日

舊幕臣を始總て町人ニ至る迄町地の内受領地或ハ借地預り地等の分上地ニ被仰出候旨去辰七月中申渡の趣も有之處今以心得違のものも有之ニ付猶又申達候間委細最前申渡の通相心得可申事

右の通不洩様可觸示もの也

〔太政官〕御布告 十一月十九日

來る廿四日新嘗祭（新嘗祭）ニ付廿二日晚より廿五日朝迄御神事候事

重經（重經）服者并僧尼參内可憚事

火の元別て相慎可申并梵鐘（梵鐘）一切停止の事

但し出火の節ハ格別の事

來廿四日新嘗祭ニ付勅任官以上酉の刻より無遅々（無遅々）參朝可致奏

任官以下ハ巳の刻より申の刻迄其官省ニ於て拜賀申上名刺取集其長より言上可致事

但勅任官以上衣冠着用可致所持無之者ハ狩衣直垂よても不苦（不苦）奏任以下ハ直垂着用可致所持無之者麻上下よても不苦候事

〔太政官〕御布告 十一月廿日

在東京 族

來る廿四日新嘗祭ニ付巳の刻より申の刻迄に參賀可有之事

但衣冠の事尤輕重服の輩ハ可憚事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿二日

大學校

舊幕臣を始總て町人に至る迄町地の内受領地或は借地預り地等の分上地は被仰出候旨去辰七月中申渡の趣も有之處今以心得違のものも有之は付猶又申達候間委細最前申渡の通相心得可申事

右の通不洩様可觸示もの也

〔太政官〕御布告 十一月十九日

來る廿四日新嘗祭（新嘗祭）は付廿二日晚より廿五日朝迄御神事候事

（重經服者并僧尼參内可憚事）

火の元別て相慎可申并梵鐘（梵鐘）一切停止の事

但し出火の節は格別の事

來廿四日新嘗祭は付勅任官以上酉の刻より無遅々（無遅々）參朝可致奏

任官以下ハ巳の刻より申の刻迄其官省は於て拜賀申上名刺取集其長より言上可致事

但勅任官以上衣冠着用可致所持無之者ハ狩衣直垂よても不苦（不苦）奏任以下ハ直垂着用可致所持無之者麻上下よても不苦候事

〔太政官〕御布告 十一月廿日

在東京 華族

來る廿四日新嘗祭は付巳の刻より申の刻迄に參賀可有之事
但衣冠の事尤輕重服の輩ハ可憚事（可憚事）

〔太政官〕御沙汰 十一月廿二日

大學校

學校規則相立候迄京都學校取建の儀可見合候事

〔太政官〕御布告 十一月廿三日

無提燈よて夜行の儀兼て被禁置候處今般東京府下嚴重取締被仰付候就てハ以來夜五時より無提燈よて往來致し候者於有之ハ見受次相速よ可召捕斷東京府兵隊へ御達相成候間此旨相心得可申候萬一御布告よ相悖り被召捕候て彼是苦情を申立候共御取上不相成候且諸御門よても無提燈此輩屹度指止候筈よ付未々の者よ至る迄其主宰々々より厚く可申聞置候事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿三日

從二位源朝臣久光
從三位源朝臣忠義

賞秩返納の儀先頃以來再三及建言候よ付當年限半高上納被仰付救荒に被爲備候處猶又今般自分並西郷以下賞秩一同返獻及懇願候儀全以至誠精忠憂國の衷情より申出候段深く叙感被爲在候得共元より其功勞よ被爲酬候厚き思食を以下賜候儀決て不可固辭旨更よ御沙汰候事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿四日

按察使

一藩縣の情狀を審按し民政の得失を督察し且時宜よより官吏の非違を糾し具狀可及奏聞事
一非常警戒の事あらば管内藩兵を以て臨機の處置し迅速兵部省へ可報知事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿四日

彦根藩

日高國の内

涉流郡 會所元より東新冠郡境あつへつ河中迄

右支配被仰付候條擇捉郡開拓の儀も猶盡力可致事

〔太政官〕御布告 十一月廿七日

今般白石縣廳角田表へ相移し改て角田縣と被稱候此旨爲心得
相達候事

〔民部省〕御布告 十一月廿七日

今般新貨幣御鑄造被仰出候よ付諸府藩縣よ於て是迄既よ堀來
候金銀銅の鑛山并年々堀山高等逐一明細よ書記當年中當省へ

差出可申事

但金銀銅共東京并大坂兩地大藏省よ於て相當の價を以御買
上相成候よ付右地へ運送着荷の上へ速よ同省へ可相届勿論
諸方よ於て勝手よ賣捌の儀決て不相成候事

〔東京府〕御 觸 十一月廿八日

市在此内遊人ころつきと唱其日稼此名目よで店借又ハ同居等
致し相定候稼商賣も無之博奕等を渡世同様よ致し候もの共有
之此程夫々召捕吟味中此處今以右体此族有之趣以外の事よ
候以來右体の者立廻り候ハ見請次第指押最寄取締兵隊へ指
出可申尤自然店貸遣置同居又ハ一夜たり共止宿爲致候よ於て
ハ當人ハ勿論所役人共迄嚴重の咎可申付條心得違無之様堅可

相守もの也

右の通市在不洩様可觸示もの也

〔東京府〕御言 十一月廿八日

桑茶植付の爲諸邸上地願人共へ是迄追々引渡候内開墾植付方
 共等閑の向も有之趣相聞甚以不相濟事候右ハ兼て布告此通
 只管府下生産を弘め候爲の主意に候故既ヨ地所引渡方も只々
 偏傾へんせいを去り公平と得候を旨とし假令土地不相應此はくせ薄税はくせ候と
 も入札中高札を以引渡候次第候へバ地所引受候も此ハ素よ
 り右主意柄相辨聊一己の私利を不營日と遂ひ生産相弘り候様
 心掛け精を勵まし力を盡し開墾かいせん培養ばいよう可致善此處右体等閑此向
 有之候てハ實以不埒の至に候依之自今右様の向有之自然植付

方等兼て布告の規則期限を過ち候分ハ決て無容赦地所引上候
 條此旨急度相心得開墾培養無怠むたい精々勉勵べんれい實効じつこう相立て生民せいじん
 恤あはれの名實二つならずして等しく潤澤じゆんたくを被り候場合ハ行到り候
 様可致候且又末ハ引渡不相成地所ハ其譯相記し箇所每杭相立
 候ヨ付御拂下拜借共早々可願出もの也
 右の趣市中不洩様可觸知もの也

〔太政官〕御沙汰 十一月廿八日

仙臺藩士故

三好監物

兼て勤王の大義を固守し賊論そくろん沸騰中はいてんちゆうハ特立し反正の策議を盡
 候處候處奸黨かんたうよ被制せいせい歴竟れいけい及屠腹殊とろはらみ臨終りんしゆうの始末等逐一達叙たつじゆ聞
 其忠節深く御悼惜ごたうしやく被爲在候依之爲祭資金目録此通下賜候事

伊達仙臺藩知事

其藩士故三好監物儀別紙此通御沙汰に相成候條於其藩も手厚く祭記を營み其忠節を表旌候様可致事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿九日

府縣に於て判任以上職員申付届差出候節姓名等巨細相添可差出事

〔太政官〕御沙汰 十一月廿九日

三戸縣

今般其縣被廢江刺縣へ合併被仰付候事

江刺縣

三戸縣被廢自今其縣管轄被仰付候事

民部省

今般三戸縣被廢江刺縣へ合併被仰付候間爲心得相達候事

〔太政官〕御沙汰 十一月晦日

宮内省

御衣類従前山科家高倉家調進の處被止以來於其省取扱被仰付候事

〔太政官〕御沙汰 十一月晦日

服制此儀追々御取調被仰付既先般御下問も相成候得共猶追て何分御沙汰有之候迄へ來春朝賀と始總て是迄の通も候間

爲心得此段相達候事

〔太政官〕御達 十一月

諸官省及府藩縣の官員當官へ出頭の節判任官たり共自今如所迄提刀の事

〔太政官〕御達 十一月

一諸御禮是迄以兒言上の處自今宮内省當番言上の事

一從政府言上の儀ハ自今侍從を以言上の事

〔大學東校〕 十一月

醫學校規則

一醫ハ司命の職にして其任最も至重なり實ハ學業精取ならざれハ健康を保全するの儀疾病を治痊するの理を知ること能ず然るハ皇國古來未だ醫道と教る此定則ナリ歴世醫學校の

設あるも定則なきを以て學業大成すること難し今般大政御維新此折柄醫ハ司命ハ關する重大此職にして御政體中欠く可らざる一科なるを被思召新ハ醫學校ト御創立被爲在候儀實ハ皇國醫道始て興る秋千古の一事深く御主意を體認し奉り學業精取を極め大成を遂げ終ハ萬國ハ超越候様各奮勵可有之事

一廉恥を尊び禮節を重ずるハ士の恒たる勿論ハ候得共醫士ハ人命を護り仁術を執るの官なれば殊ハ恭謙の風を重じ苟も

瀆濫の所業有之間敷候事

一入學ハ二七の日を限り候事

一入學の生徒少年の輩ハ小學校ヨ入り學科順序を逐ひ了り候

後大學校に入り終よ成業を遂ぐ可し故よ五年の間留學一狼りに退校歸省を免さず然ども晩學の徒ハ小大學校の學科を脩て病院よ就て治則實驗一早く其要旨を得ること專務たる可き事

但留學年限不濟中無據退校歸省相願候者ハ委細取糺候上相免候事

一等級の進退ハ毎月會讀の優劣を以て相定め候事

但後日學級相進候上ハ教師試業を経候上甲乙を相定め候事

事

一毎日休業の外定時刻の間登校日課の通り堅く相守り無懈怠可致精勵事

一入寮の生徒ハ寮則を嚴重相守り總て舎長の令よ隨ひ候事

一精勤進學の者年末取調の上褒賞下賜候尙又學業成達の者は其分よ應じ御登庸有之候事

一校中の範則を犯し不行狀の輩ハ嚴重相當の罰よ處し尙不改數度よ及び候者ハ其藩其支配へ申達し放校申付候事

但令放校候上ハ終身醫業差留候事

一學制規則之儀よ付存寄有之候者ハ無忌憚可及建言候事

右の條令嚴重可相心得者也

〔太政官〕御布告 十二月二日

諸官並宮華族之家士及諸藩士等東京在留之向東京府下へ相關り候公事出入有之節以來東京府より其主長へ一應掛合之上本

人直よ呼出取捌候間此旨兼て相心得可申事

但諸官員之儀は奏任以上ハ家來判任以下ハ本人呼出の事

(東京府へ此御沙汰あり略す)

〔太政官〕御布告 十二月二日

一先般各藩大義名分のぶんぐい紊擾みだれを正し海外諸國の形勢を察し以て其封土ほうどを奉還す依て大よ公論衆議を被爲盡府藩縣一途之政令よ歸し天下と共に綱紀かうぎを更張被遊度御主意よ付更知藩事よ被任隨て家祿之制被爲定藩々よ於ても維新の御政體よ基き追々改正可致就而ハ中下大夫士以下之稱被廢都て士族及卒と稱し祿制被相定候爾後各其地方官よ於て可爲貫屬旨被仰出候條篤と御主意を奉體し銘々分を守り其職を可盡候事

但知行所一同上地被仰付都ていん糜米まきを以て賜候事

一大夫士以下之面々今般家祿御定相成候よ付而者其家來共三代以上相思之者ハ相應の御扶助可被下候間姓名並從前之祿扶持米等取調早々可申出事

但舊主よ於て扶持致し候儀ハ可爲勝手事

規則

一祿制二十一等よ分ち士族ハ十八等よ止候事

但士族之元高十三石よ滿たず卒の元高八石よ滿ざる者ハ是迄通之事

一元祿ハ現今被宛行候高を以て定候事

一舊來同心輩ハ卒と可稱事

一 祿制ハ總て現石高を可稱事
 一 祿制當年ハ是迄之通來春より可減事
 一 祿ハ都面糜米よて賜候間其觸頭よて取糺シ大藏省へ可申出
 事

祿制

一元祿萬石未滿九千石迄	現米二百五十石
一同九千石未滿八千石迄	同 二百二十五石
一同八千石未滿七千石迄	同 二百石
一同七千石未滿六千石迄	同 百七十五石
一同六千石未滿五千石迄	同 百五十石
一同五千石未滿四千石迄	同 百三十五石

一同四千石未滿三千石迄	同 百二十石
一同三千石未滿二千石迄	同 百五十石
一同二千石未滿千五百石迄	同 九十石
一同千五百石未滿千石迄	同 七十五石
一同千石未滿八百石迄	同 六十五石
一同八百石未滿六百石迄	同 五十五石
一同六百石未滿四百石迄	同 四十五石
一同四百石未滿三百石迄	同 三十五石
一同三百石未滿二百石迄	同 二十八石
一同二百石未滿百五十石迄	同 二十二石
一同百五十石未滿百石迄	同 十六石

一同百石未滿八十石迄 同 十三石
 一同八十石未滿六十石迄 同 十一石
 一同六十石未滿四十石迄 同 九石
 一同四十石未滿三十石迄 同 八石
 一同三十石以下是迄之通
 但免二つ五分四捨五入法を以て斗に切上げ可申事

〔太政官〕御沙汰 十二月二日

東京府 京都府

今般士族の面々別紙（前文御布告を云）の通被仰付其管内より有之分ハ總
 て可爲貫屬旨被仰出候間此段相達候事

○

民部省

今般士族の面々別紙（前文御布告を云）の通被仰付候間大坂府並諸縣其
 省より相達可申候事

○

大藏省

今般士族の面々別紙（前文御布告を云）の通被仰付候條爲心得相達候事
 〔太政官〕御沙汰 十二月二日

鳥取藩

後志國（おののくに）鳥牧郡（たまごまき）の内

會所元より南の方あつき境迄

但會所相屬

右其藩支配被仰付候事

〔東京府〕御觸 十二月二日

世話掛

中年寄共

河岸地代の儀以來受領地拜借地請負地等の無差別沽券地先
同様所並地代上納可致事

右の趣町中不洩様可申通もの也

〔太政官〕御沙汰 十二月三日

殿功の

大夫士

今般士族祿制被相定候に付て、其家來共別紙（前文御布の通被

仰出候處共方共家來昨年諸道出張の者は三代以上たりとも御

沙沙の趣も有之候間名前取調可申出事

〔太政官〕御沙汰 十二月三日

佛光寺

律志國島牧郡の内

運上屋元より東の方系かえちし

右地所支配被仰付將又石狩國本幌空知兩郡の内へも便宜の土
地開拓相成候様盡力可致事

〔太政官〕御沙汰 十二月三日

三根中藩

其藩支配地今般土地替被仰出候處更に御詮議の次第有之御差

止相成込高の内五百石被召上候間越後國蒲原郡平野並下山村の内よて上地水原縣へ引渡可申候事

〔大政官〕御布告 十二月五日

先般御布告有之候通追て新貨幣御鑄造御國內金銀貨幣御改正昨年御施行の楮幣（紙幣）よ追々御引替可相成儀よ付諸藩よ於て舊幕府より許可を受従前製造の楮幣以來其數と増益致し候儀嚴禁被仰出候間是迄製造總高取調來午の二月中迄よ大藏省へ可届出候且御一新後府藩縣よ於て楮幣製造の向ハ以來通用停止被仰出候間此段相達候事

但製造無之府藩縣ハ其趣早々同省へ可届出事

〔太政官〕御沙汰 十二月五日

越後按察使

民政ハ治國の大本至重の事とす御一新以來専ら億兆其所を得て生業勉勵候様との御趣意の處越後全國の儀ハ去年兵馬の衢（きりぎりす）と成り加之地方官屢變（しばしば）換諸藩の情狀（じやうじやう）未だ區々よも有之哉（あやま）よ相聞ハ彼是下民安堵よ至らず實よ北方の動靜（どうせい）よ相係り候儀よ付今般當分按察使兼勸被仰付候よ付てハ藩縣の政績（せいしん）を熟察（あはく）し地方官と戮力（りくりき）協心（きやくしん）御趣意を奉體し専ら布政施治の道を盡し上下の情を貫通せしむ可く候事

○ 十二月七日

水原縣

其縣管轄之兵隊三十五歲以上之者兵部省へ引渡可申三十五歲

以上之者ハ相應之手當差遣シ歸籍可申付事

○ 十二月七日

兵部省

今畿水原縣兵隊引渡候ヨ付於其省管轄可致事

〔太政官〕御布告 十二月八日

判任以下諸官員遠國御用出立歸着共其時々其官省より大藏省

へ書面を以可相届事

〔太政官〕御布告 十二月八日

先般奥羽兩國之内分國被仰出候處此度更ヨ割在圖面之通御改

正ヨ相成候間此旨相達候事

磐城國

- 一高六萬四千七十石二斗五升八合 白河郡
- 一高四萬八千九百九十八石一斗四斗九合 石川郡
- 一高十萬六千七百五十二石八斗五升一合八勺五才 田村郡
- 一高四萬石四斗七升九合五勺一才 菊多郡
- 一高四萬三千六百七十七石九斗五升五合 白川郡
- 一高五萬四千八百十六石一斗二升九合三勺 磐前郡
- 一高三萬二千四十一石六斗六升八合 磐城郡
- 一高三萬千七百二十五石七斗九升 檜葉郡
- 一高五萬千四百一十一石六斗二升一合 標葉郡
- 一高二萬四千八百九十八石一斗九升 行方郡
- 一高二萬三千五百三十九石一斗三升 宇多郡
- 一高三萬九千四百四十二石九斗四升 刈田郡
- 一高二萬三千五百八十一石八斗一升 伊具郡
- 一高二萬三千五百八十一石八斗一升 亘理郡

右十四郡

高合六十萬六千九百四石七斗九升五合六勺六才

岩代國

一高八萬七千二百九十四石六斗六升六合九才

一高五萬二千六百九十一石一斗七升六合

一高十二萬二千八百四十八石二升

一高七萬四千三百八十四石二斗六升五合

一高六萬九千五百五十九石六斗二升八合九勺

一高九萬七千九百五十九石九斗一升三合三才

一高五萬四千七百四十四石四斗四升七合二勺九才

一高八萬九千三百六十八石五斗九升二合九才

一高十一萬四千四百五十七石二斗五升一合六勺

右九郡
高合七十五萬五千七百三十九石九斗六升

會津郡

大沼郡

耶麻郡

河沼郡

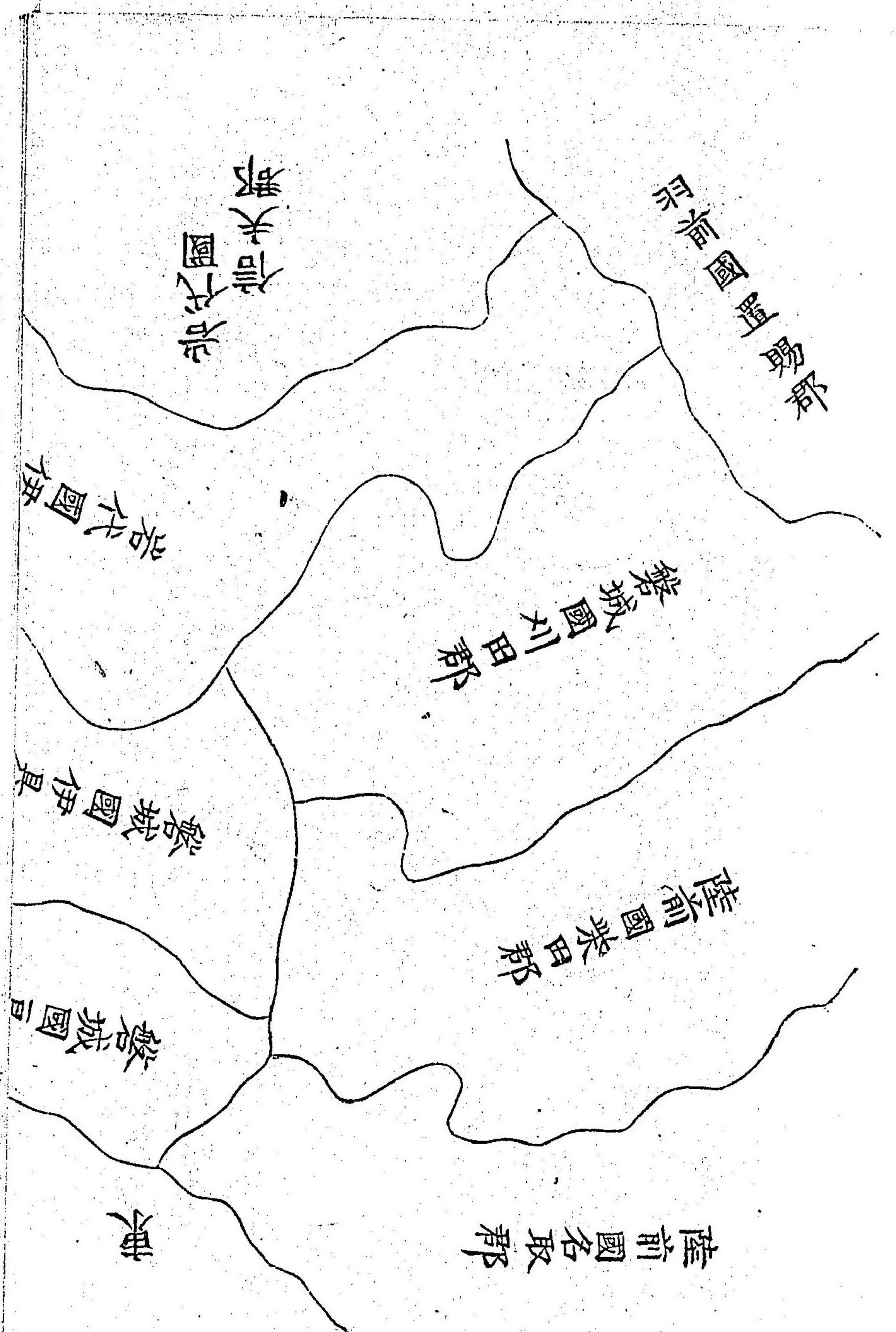
岩瀬郡

安達郡

安積郡

信夫郡

伊達郡





〔太政官〕御沙汰 十二月八日

福島縣

今般別紙圖面之通分國御改_レ相成候_ニ鳩胸山_{ヨリ}峠田嶽迄之間
 山々峯々通を以刈田伊達兩郡分界_ト被_レ相定候_ニ條爲_レ心得相達候
 事

〔太政官〕御布告 十二月八日

今般府之職員中

典事 相當從六位 權典事 全 正七位

右之通被_レ置候間爲_レ心得相達候事

〔太政官〕御沙汰

刑部省

從來東京府に管轄之囚獄總て其省へ請取管轄可致事

東京府

其府管轄之囚獄總て刑部省へ引渡可申事

〔民部省〕御布告 十二月八日

北海道並伊豆國附島の産物入津の節へ贈狀を以商社并其渡世の者より速に通商司へ相届可申自然自儘に水上致し拔荷其他不正の取計有之取糾の上事宜に寄其荷物取上可申候間心得違無之様可相守事

〔太放官〕御布告 十二月九日

去月廿九日酉の半刻外宮末社（延喜式）遙拜所燒失延燒も難計御動座被

爲在戌の刻鐘火直に還幸に相成候旨言上有之依之明後十一日酉の刻於庭上御拜被爲在候事

明後十一日神宮御拜に付自今晚刻到十二日朝御神事候事

重（ちやうけい）輕（かろ）服（ふく）者（もの）僧（しやう）尼（に）參朝可憚事

但政府出仕の輩に十日酉の刻迄に不及憚事

〔大藏省〕御達 十二月九日

旅費規則中東海道之外諸街道繼人足東海道三兩二分の見込を以拂方可有之之旨相達置候得共事實不相當に付外道中筋脇往還等之分も巨細取調出來候迄人足見積當分在之通相定候間爲御心得此段及御達候也

中仙道從東京西京迄

人足一人に付金三兩一分

奥州街道自東京白河迄

人足一人に付金一兩一朱

甲州街道自東京甲府迄

人足一人に付金三分三朱

脇往還

人足一人十里に付永二百三十文

右之通

〔太政官〕御布告 十二月十日

去月廿九日外宮末社遙拜所燒失之節御動座被爲在候に付明十

一日罷朝被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 十二月十日

佐賀藩

千島國の内振別郡

右其藩へ支配被仰付候條開拓守備相兼盡力可致候事

○

高知縣

千島國の内藥取郡

右同文

○

増上寺

根室國花咲郡の内志古丹島

右其寺へ増支配被仰付候事

〔大藏省〕御達 十二月十二日

官祿旅費等は迄可成丈小札相渡來候處大札融通の道も相付候趣に付以後之儀者御有合大札重もに相渡其外諸官省定額御入用等も同様取計候間自然差支之儀も有之候ハ、大札受取高之内爲替方へ申入新小札と引替候様可被致尤引替大札へハ札面左の角へ引替何之誰と記し調印之上爲替方へ相渡候様御取計可有之此段相達候事

〔太政官〕御布告 十二月十三日

官省府藩縣其他諸局よて諸達伺届其餘往復等諸般官用よ供し

候紙本或ハ全紙を用ひ或ハ半截を用ひ各局にて取集置候節大小長短各種齎整せず依てハ緊要後證（せんやうごしやうのしやう）よ充へき事件も紛亂に至候儀も有之畢竟官用紙定式無之より右様不都合を生候よ付此度官用界紙定式左之通可相心得事

- 一 紙本ハ美濃紙本半紙其外右兩種之尺度よ合志候紙を可用事
- 一 界紙ハ別紙雛形（す）之通よて官省府藩縣及諸局之號を署る印刷すへき事

右之通に候間來午年二月より定式界紙相用可申事

〔太政官〕御沙汰 十二月十四日

刑部省

刑律之儀は其省御委任勿論之事よ候得共新律御確定よて兵卒

罪狀之儀ハ於兵部省取計候様相達候尤餘人連累等有之兵隊限
よ無之罪狀ハ其節の次第ヨ寄り於其省可取計候事

〔太放官〕御沙汰 十二月十四日

京都府

戊辰の歲賊徒掃攘之砌京都在住之力士共諸道出張之段奇特之
至よ付角力場と考て便地之箇所永世下賜候間於其府取計可致
事

〔太政官〕御布告 十二月十五日

來る十七日於神祇官假神殿御鎮座並鎮魂祭祓爲行候事
右に付參向之官員左之通

假神殿御鎮座 午の刻より

一太政官

右大臣 納言一人 參議一人 辨官一人

一諸省

一集議院

一大學

奏任以上一人

但諸官人參拜可爲勝手事

一彈正臺出席此事

○

鎮魂祭 酉の刻より

一太政官 參議一人 辨官一人

一 諸 省

一 集 議 院

一 大 學

奏任官以上一人宛

但諸官人參拜可爲勝手事

右之通相達候事

〔太政官〕御布告 十二月十五日

自今官服之節撥四時共着用可致事

但撥代足袋相用候儀不苦並に平常足袋の儀用不用可爲勝

手事

〔太政官〕御沙汰 十二月十五日

山口藩 奥平謙輔

福井藩 勝間田百太郎
市村勘右衛門

村田巳三郎

高鍋藩 岡部造酒之助
阪田潔

山口藩 井上小太郎

鹿兒島藩 新納四郎右衛門

山口藩 尾行八郎

右金三百兩宛

右金貳百五十兩宛

長田次郎右衛門

鹿兒島藩 表田耕之丞

吉田清藏

市東太郎左衛門

前田伊右衛門

奥板藩 飯塚貢

山口藩 瀬原泰藏

厚東次郎介

吉本藤太

右金百五拾兩宛

戊辰の年賊徒掃攘此砌軍事勉勵の段神妙の至被思食仍爲其慰

勞目録の通下賜候事

山口藩 半三郎

鹿兒島藩 田尾善左衛門

吉原彦左衛門

松井十郎

右金百兩宛

同上 神妙の至被思食の七
字 奇妙の特の至候よ作る

大山藩 松田將造

戊辰の年賊徒掃攘の砌軍務勉勵此段神妙の至被思食仍爲其賞

終身五人扶持下賜候事

白川縣支配所
磐城國白川郡白坂驛

太平八郎

其身一代苗字帶刀差免五人扶持被下候事

同縣支配所
同國同郡白川驛

芳賀源左衛門

其身一代苗字帶刀差免四人扶持被下候事

福島縣支配所伊達郡石延村

次郎七

其身一代四人扶持被下諸役免除申付最寄縣支配所へ移住勝手

の事

同所

久之助

死去に付妻子へ一代三人扶持被下諸役免除申付最寄縣支配所へ移住勝手の事

氷原縣支配所
越後國蒲原郡葛塚村

遠藤七郎

其身一代苗字帶刀差免五人扶持被下候事

新發田藩支配所
越後國蒲原郡安田村

松田秀次郎

同上

其身一代三人扶持被下候事

柏崎縣支配所
越後國魚沼郡柏崎

星野 藤兵衛

水原縣支配所元下大夫溝口某知行所
越後國蒲原郡大野村

小林 政司

其身一代苗字帶刀差免三人扶持被下候事

新發田藩支配所
越後國俵柳村

小林 六兵衛

同上

白川縣支配所
磐城國白川驛

佐太郎

金百兩被下候事

同縣支配所
同

甚八郎

金八拾兩被下候事

白川縣支配所
磐城國白川郡白坂驛

順之助

金四拾兩被下候事

同縣支配所
同

新左衛門

金五拾兩被下候事

同縣支配所
同國同郡白川驛

金三拾兩被下候事

多三郎

福島縣支配所伊達郡石菟村

平十郎

金五拾兩被下候事

民部省

別紙名前の者共昨戊辰此年賊徒掃攘の砌盡力不少段相聞奇特
の至よ付表目の通御賞賜被下候間於其省取計可致候事

第一大隊

撒兵隊

金千兩

同
三番中隊

左小隊

己巳の年流賊追討の命を奉じ蝦地よ涉り各所成備精勤此段神
妙被思食仍爲其慰勞目錄の通下賜候事

兵部省

別紙此通被仰出候條夫々可分與事

〔太政官〕御沙汰 十二月十七日

兵部省

刑律御改正に付當分之處兵卒罪狀之儀ハ於其省取計可申事

但餘人ハ連累等有之節ハ其次第ハより於刑部省取計候事

〔太政官〕御沙汰 十二月十七日

御一新に付有功之輩總て御賞典之儀ハ出格之事ハ付全分御渡方可有之勿論之處當年ハ氣候不順米穀不熟殆と皆無ハ屬する所も有之御歳入別て寡く來年會計之目途不相立場ハ立至候ハ付甚以御不如意之至ハ候得共千石以上之分ハ當年の三分の一殘三分の二ハ來午年七月十二月と都合三箇度ハ下上賜り千石以下之分ハ如定則當年半高被下殘り半高ハ午年七月ハ下賜候間得其意大藏省へ可申出候事
但來午年より千石以上以下共年々十二月半高翌七月半高御

渡可相成候條此段相達候事

〔太政官〕御沙汰 十二月十七日

大學校

自今大學校を大學と改稱開成所を大學南校醫學校を大學東校事可稱

〔太政官〕御沙汰 十二月十八日

彈正臺

各國公使重大之事件應接之節爲立會出席可致事

〔太政官〕御沙汰 十二月十八日

東京府

今般大學句讀所被止候ハ付てハ其府ハ於て少學教育之道施行

可致候事

但從來之句讀所其儘引移之儀ハ大學商議之上取扱可申事

〔太政官〕御沙汰 十二月廿日

兵部省

今般京都兵部省被廢候事

但京都成兵管轄之者取調可申出候事

〔太政官〕御沙汰 十二月廿日

德川從四位昭武

其先贈從二位中納言光國兵革始息文教未明の時に方り首よ尊王の大義を唱へ君臣の名分と正し殊よ心を修史よ盡し以て千古の廢典を興す其功績深く御追感被爲遊依之贈從一位 宣下

候事

德川從四位昭武

祖父從二位大納言齊祖祖先光國の遣旨を繼ぎ専ら心を皇室よ存し内ハ綱紀の衰頹を憂ひ外ハ邊備の怠弛を思ひ自ら奮つて國家を維持せんとす其忠志深く御追感被爲遊依之贈從一位 宣下候事

蒲生君平

草莽一介此身を以て綱紀の衰弛を慨し名分の紊壞と憤す然れ共時の不可なる力を著述よ専らよし以て朝廷を尊崇し世教を

補裨す其風を聞て興起する者不少其氣節深く御追賞被爲在依
之里門よ旌表し子孫へ三人扶持下賜候事

高山彦九郎

○
草莽一介の身を以て勤王の大義を唱へ天下を跋渉し有志の徒
を鼓舞す世此岡極よ遭ひ終よ自刃して死す其風を聞て興起す
る者不少其氣節深く御追賞被爲在依之里門よ旌表し子孫へ三
人扶持下賜候事

永平寺

○
昨夏御沙汰の筋有之候處今般御取札の上其寺總持寺共本山如
故各其末寺取締違亂無之様可致旨更よ被仰付候事

但永平寺ハ道元開基之祖山たるを以て席順總持寺の上たる
べく尤兩寺の末派互よ轉住向後差止候事

總持寺

○
同上 其寺を永平寺よ作る

但永平寺ハ道元開基之祖山たるを以て席順總持寺之上たる
べく且其寺從來輪番持之處向後碩學智識之者を擧げ住持た
らしむべく候尤兩寺之末派互よ轉住自今差止候事

〔太政官〕御布告 十二月廿二日

來廿五日孝明天皇御陵御遙拜の事

但廿四日酉の刻より廿五日午刻迄重輕服者并僧尼參朝可憚事

〔太政官〕御布告 十二月

來る廿五日御祭典に付不及出仕候事

廿七日御用仕舞に付廿六日休暇無之事

廿九晦兩日之内歳末御祝儀可申上事

〔太政官〕御布告 十二月廿三日

來る正月三日神祇官へ行幸天神地祇八神殿御歷代御靈御親祭

被爲在候旨被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 十二月廿六日

岩鼻縣

吉井藩被廢候に付支配地其縣管轄被仰付候事

但從來吉井藩中之人材を撰み更に其縣官員に充て士族並に

卒之取締可申付候事

○

奈良縣

狹山藩被廢 以下岩鼻縣同文

但從來狹山藩 以下岩鼻縣同文

〔詔書〕 十二月廿七日

故從一位贈右大臣藤原實萬愛乾綱之不振而國威之不宣奉事

先朝竭盡忠猷慨然有匡濟之志至于實美以庭有成其諡實萬曰忠

成宣

〔太政官〕御布告 十二月廿七日

昨年兵馬紛擾御用途御多端に付楮幣御施行一旦之急被爲凌候

得共右楮幣の高ハ全く國債ヨ相成當年ヨリハ國債可相償答之
處豈科諸道不實奥羽諸國殆皆無屬シ當節歲入總計マテ百万
石餘之御不足ヨ相成候ヨ付非常之節儉被仰出候外ハ無之場合
立至リ候間諸官省並府藩縣ヨ於ても猶更節儉ト主トシ可成
丈け冗費を省き御用途萬分之一をも補益候様篤ト相心得可申
事

〔太政官〕御布告 十二月廿七日

元日四方拜詣之輩丑の刻無遅々參朝之事
朝拜奏任官以上非役華族寅の刻無遅々參朝之事
二日判任以下ハ六位拜叙たり共官省ヨ於て長官相受奏聞
右之通更被仰出候事

〔太政官〕御沙汰 十二月廿七日

集議院

當分重大之議事無之ヨ付閉院被仰出候來春開院之儀ハ前以御
達相成候事

但議員一先御暇被下候尤建言取扱之儀ハ可爲是迄通事

〔太政官〕御沙汰 十二月廿七日

神祇官

來正月三日於其官御親祭被爲在候後翌四日より士民一同參拜
被仰付候條相違候事

〔太政官〕御布告 十二月廿八日

八神殿御祭典之節參拜之官員階上ハ勿論庭上たりとも脱劔拜

禮可有之事

〔太政官〕御布告 十二月廿八日

當年凶荒會計之目的不相立就てハ官祿來正月より九月迄定相場一石八兩之宛を以て被渡下候事

但官祿十等迄ハ十分一十一等より十三等迄ハ十分二十四等以下總て十分三現米よて被渡下候事

〔東京府〕御觸 十二月廿九日

今般廻漕會社附蒸氣飛脚船御備相成來午正月中より東京大坂等往返致し候條御用旅行の者ハ勿論武家百姓町人婦女子よ至迄右船よて往返致し度ものハ相當の入用差出乗組且御用物を初商賣荷物等是又相當の運賃を以積込候筈よ付望のものハ諸

事關岸島廻漕會所へ可申出候事

〔太政官〕御布告 十二月

遊獵發砲等の儀よ付てて當四月中御布告(第三册丁)の趣も有之候處今般普く海外諸國の法律をも參酌の上遊獵規則被爲立候間別紙の通可相心得事

遊獵規則

- 一 遊獵相願候ものハ其支配の府藩縣よ於て糺の上差免印鑑可相渡尤年々十一月より翌二月を限免許有之四箇月よ付運上永四貫文の積よ付願出候節より月割を以て可相納候
- 一 遊獵場所此儀ハ各府各縣共人家拾軒以上なれる所よてハ發砲すべからず假令散在の人家よても程近の場所よてハ發砲

不相成候且又門塀有之場處へ立入或は田畑踏荒候儀堅く致すまじく若三箇條を犯す者へ鑑札并鉄炮取上其上金五兩の過料可申付候

一遊獵の砲射過て人馬よ當り怪俄有之候へ、相當の療治代可申付若人命よ拘り候へ、可爲重科馬斃れ候へ、相當の過料金可申付事

一見廻役人相改候節印鑑無之もの又ハ兼て鑑札請取候者にても夫念致遊獵よ出改受候節持參無之よ於てハ鉄炮取揚金拾五兩此過料可申付

附遊獵願濟本人の外よても鑑札借受持參致し候上ハ本人同様たるべし尤も同伴人別よ鉄炮を携ふ時ハ銘々印鑑を

所持可致若印鑑無之者ハ本文の通告可申付候

一遊獵の者右規則を犯すよ於てハ見廻役人直ちよ其筋へ引立前書の通可申付若引立候を相拒候歟不法の所爲に及び候得ハ召捕手餘り候節ハ嚴重の可及處置事
右之通候事

府 藩 縣

別紙(前文御布)の通内外遊獵被相定候間鑑札相渡見廻役人差出規則の趣を以テ取締可致事

〔太政官〕御 達 十二月

一日々十字より十二迄小御所出御之事

一 十字より十二迄政廳議事願伺届諸書類辨官よて見込書付各
分課の印を押し持參之事

但機務議事別段之事

一 出御中三職の中より商議此事件奏聞宸斷を経て辨官よ下し
施行之事

一 議事中至急之事件と雖も諸官員許可を得ざれハ入る事を禁
す

一 諸官省願何等十二字より二字迄辨官へ出すべき事

但辨官を経ずして出すものハ非違たるべき事

一 制可の事件大臣不參之節ハ納言參議よ於て施行可致事

一 官廳坐次下の間 上段 大臣納言參議着坐辨官東の間分課を以

て着坐の事

一 御前參仕之輩衣冠狩衣直垂等之内着用可有之事

一 日々十字出仕二字退出之事

但節朔一六休暇之事

右之規則を犯す者ハ彈正其非違を糾すべき事

〔辨官〕御達 十二月

諸官省門前等正月松飾之儀手輕に取設候様可有之此旨相違候
也

○

正月式

元日 寅刻 四方拜

卯刻 朝拜親王並奏任官以上非役華族
 二日 判任以下官省に於て長官相受け奏聞
 卯刻 神官奏事始
 四日 同刻 政始
 卯刻 加茂奏事始
 五日 氷川社同上
 十日 巳刻 非藏人北面
 巳刻 御吉書
 十五日 三球打
 廿日 巳刻 社家
 廿一日 巳刻 法中

廿三日 巳刻 御講釋始
 廿四日 御會始
 以上
 民部省 外務省 御達 十二月
 西洋形商船蒸氣ハ百噸以下付一箇年金十五兩風帆ハ百噸以下付一箇年金十兩宛税金通商司へ可相納候事
 但在來日本製商船の分ハ積石數百石以下付金一兩宛可相納事
 有之通相定候條嚴重可相守事
 假名 公布ニ寫 第二册 終
 傍訓

○正誤

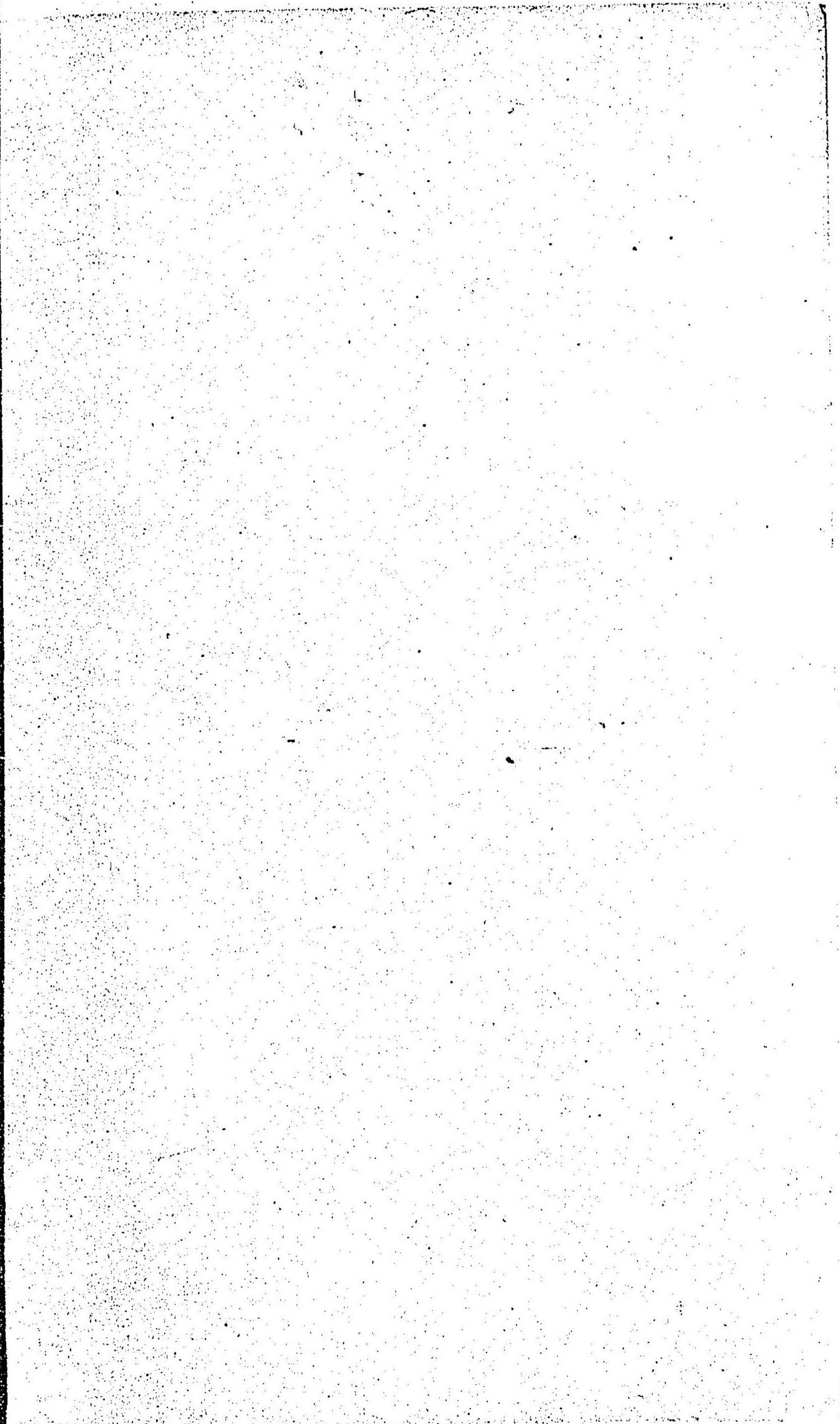
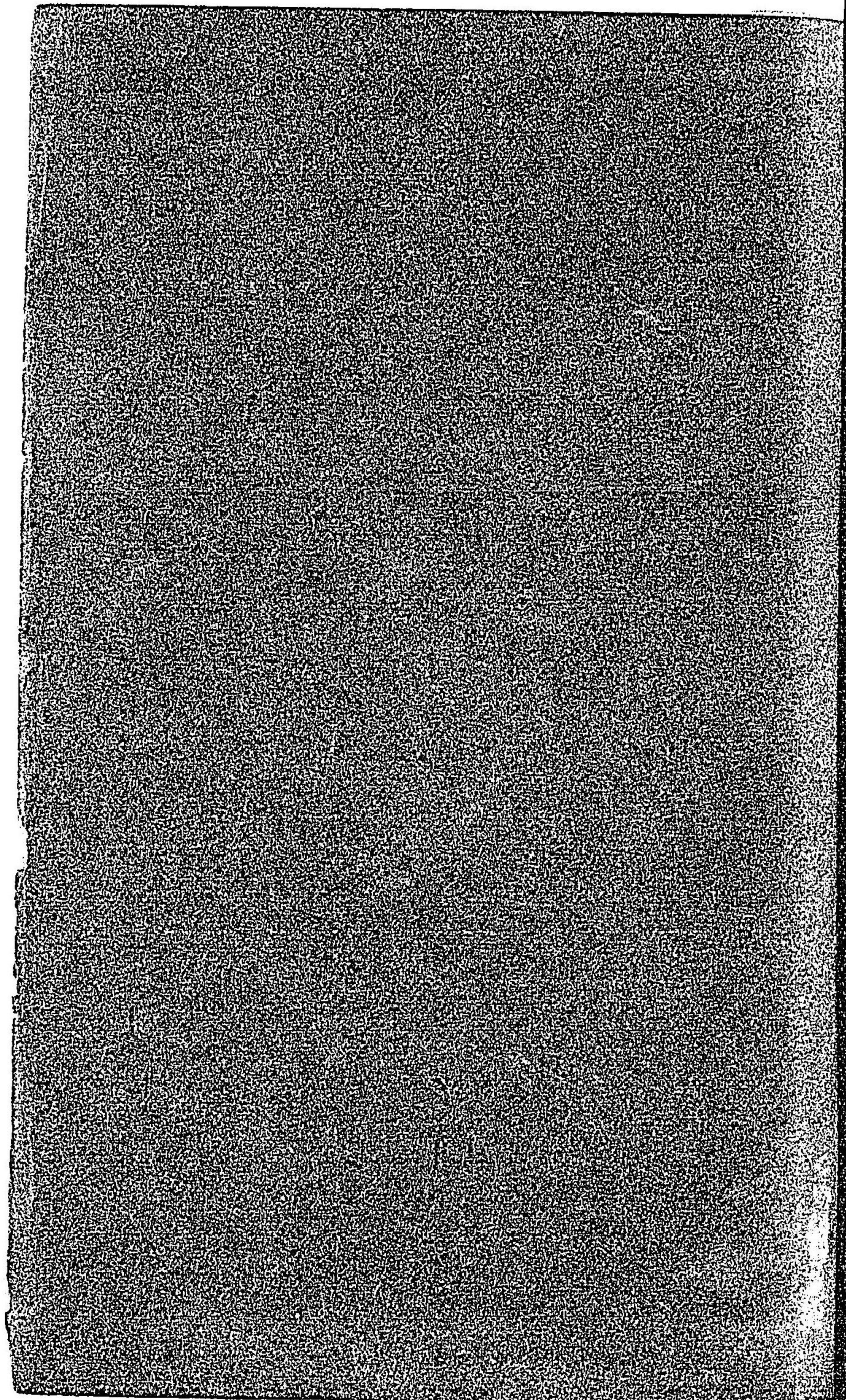
○七十行十日ハ晦日丁百二十四行十技ハ披丁百六十九假ハ段七百三十八徒
 ハ待五百四行十無ハ有七百五十五生ハ主丁四百三十一行一領ハ願六百
 八行最ハ島七百四十八行十珠ハ殊一丁百八十八應ハ慶六百四十九行十接ハ
 接丁五百卅三行三額ハ願丁五百卅四行八記ハ祀六百三十四行面ハ而五百五
 九在ハ地三百六十八庭ハ底以上字ハ誤植
 ○丁百八十一行註○の内丁附百卅九三三丁八行同上百六次の百丁附
 三百十一三百十二三丁月六日八月十五日以上字ハ脱植
 ○丁百九行被丁二百四十三行前條云々以下二行以上字ハ衍植
 ○百七十一二丁二百四十一二丁三百九十三四丁以上丁附

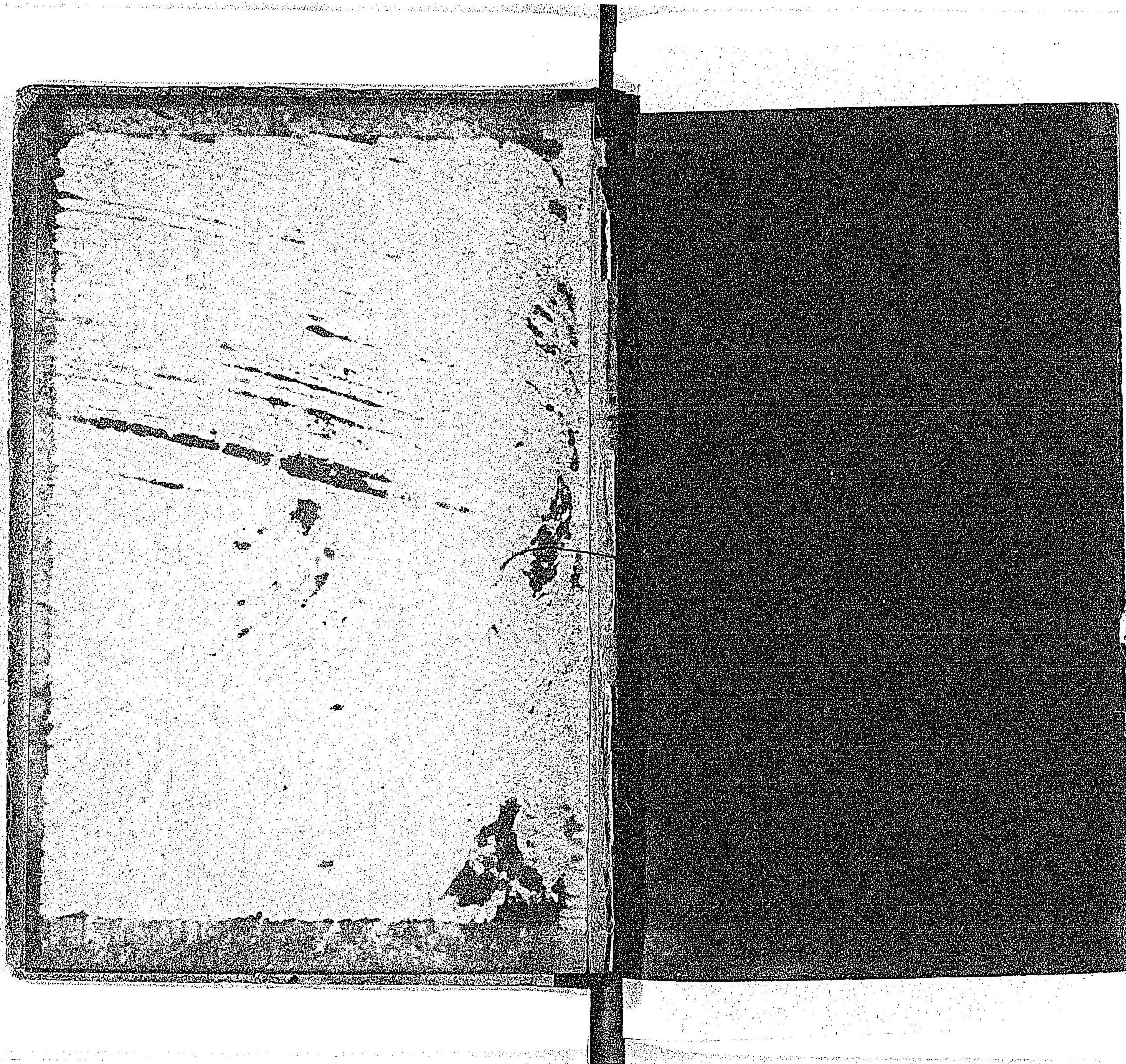
脱に非ずあて敷を誤る

明治八年十二月廿四日版權免許

編者 鈴木憲章
 東京芝區巴町二十八番地
 大坂府平民

出版人 中山喜錄
 東京日本橋區本町四丁目九番地
 東京府平民





東 京 圖 書 館

新 門 三 八 函

架 九

部 一

號

類

